

# 韓国の近代美術と美術教育実践のための構造について

福田 隆真<sup>\*1</sup>・金香美<sup>\*2</sup>

On the Structure of Modern Art and Art Education in Korea

FUKUDA Takamasa<sup>\*1</sup>, KIM Hyang Mi<sup>\*2</sup>

(Received December 20, 2019)

キーワード：韓国、近代美術、美術科教科書、美術教育、四層構造

## はじめに

アジアの美術教育の領域や対象を考えるうえでは、独自の伝統文化や伝統美術、伝統工芸と西洋美術の影響を考慮する必要がある。それはアジアの諸地域の民族が培ってきた伝統美術、伝統工芸に西洋からの植民地化によって多くの影響を齎されたという歴史があるからである。また、東アジアにおいては西洋の直接的な植民地化は少なかったものの、西洋文化と文明の影響は多大であった。

韓国においても日本と同様に、西洋美術の影響を受けてきた。西洋美術の導入のルートは、大きく二つに分かれていた。一つは東京美術学校などの日本からの影響であり、これが主なルートであり、日本への留学生の功績であった。もう一つは、西洋キリスト教系の宣教師や王宮貴族の中における西洋美術家たちとの交流による西洋美術の直接的な紹介であった。こうした西洋美術の影響に対して、本稿では自国の近代美術がどのように変遷して美術教育に関連したのかを考察する。考察の一つの方法としてアジアにおける近代美術の四層構造を想定する。(注1)

## 1. アジアの美術教育における近代美術の四層構造

東アジアと東南アジアでの美術教育を考えるうえで、教科書教材の立案、近代美術の教授、国民文化の形成などの観点から、独自の伝統文化と西洋美術の影響の関係と近代美術の構造を検討すると、以下のような4つの層から全体が構成される。(図2)(注1)

- (1) 第1層：民族の伝統文化（アイデンティティの基盤）
- (2) 第2層：西洋文化の影響（グローバル化第一段階）
- (3) 第3層：近代美術・モダンデザインの国際様式（グローバル化第二段階）
- (4) 第4層：現代美術（グローバル化第三段階）

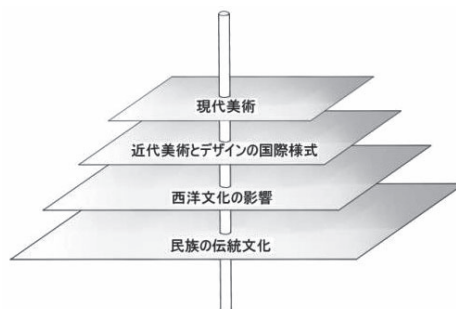


図1 「美術教育のためのアジアの近代美術の四層構造」

\*1 山口大学理事・副学長 \*2 韓国淑明女子大学教授

これらの四層は便宜的に象徴する言葉で表している。(1)の伝統文化は歴史の長い地域では原始美術から近代以前までが包括できる。東アジア地域では書や絵画、宗教に関連する彫刻、工芸品なども含まれるし、民画のような庶民に流布している民族文化も含まれる。東南アジアでは様々な工芸品や日用品、宗教建築なども含まれる。また、(2)の西洋文化の影響については、美術で代表的なものとしての油絵の具による表現がある。いわゆる西洋画の材料と表現がアジアに影響を及ぼしたことである。東南アジアでは西洋諸国の植民地化により、直接的に西洋美術が導入され影響を受けた。

(3)は(2)の延長ではあるが、西洋美術の定着により、直接的に西洋画の影響を受けたものや自国の文化と融合したものが含まれる。さらには19世紀末からの西洋絵画の様式の変遷に見られる後期印象派、キュビズム、フォービズム、構成主義、シュールレアリズム、抽象主義などの表現の多様化が影響を及ぼしたのも含まれる。これらの表現の多様性の追究が自国や民族でそれぞれに展開され、美術文化のグローバル化をもたらしたのである。また、この時代にはバウハウスをはじめとする近代デザインの運動が展開され、国際様式の確立に向かうようになった。この第三層の特徴として見られるのは「視覚言語」である。20世紀になっての写実から構成や創造に向かう美術やデザインの根底には、造形要素と造形原理による造形方法の覚言語が常に介在している。こうした近代美術の多様性とデザインの国際様式が混在している状況を示すものである。

そして(4)は第二次世界大戦後のグローバル化による表現の多様性ととも、国際社会に対するメッセージの表現や表現手段や方法の多様化による現代美術の状況を示している。人権や環境、政治、宗教などの社会問題に対するメッセージを発信する媒体としても美術が用いられている。

このように時間の経過から大きな結節点を見出すと、地域による時間差はあるものの、前述の四層構造を見ることができる。もちろん、アジア地域における国の成り立ちは複雑な経緯を有しているため、四層構造がすべてに当てはまるとは限らない。国として成立している現在からそれぞれの国民文化を理解する場合には、この四層構造を適用することで、美術教育の領域や対象である美術文化の総体を捉えることが可能となる。

## 2. 韓国の美術教育としての近代美術の四層構造

ここではアジアの近代美術の四層構造の考え方に基づいて韓国を対象にして、伝統美術から現代までの美術の変遷を概説する。韓国(歴史的には朝鮮であるが、本稿では韓国と表記する)は1910年に日韓併合による日本の統治時代が始まり、1945年に第二次世界大戦の終戦によって独立を果たした。日本の統治ということでは、韓国も台湾も同様な経緯を有している。そうした歴史的基盤を考慮して近代美術について絵画を例に四層構造で整理すると以下ようになる。

### 2-1 韓国の伝統美術(第一層)

韓国の伝統的な美術は学者や貴族たちの余技としての文人画(水墨画)、宮廷画家や職業画家たちによる絵画(宮廷絵画、山水画、人物画など)、一般庶民たちの中で愛玩された民画や風俗画などがある。以前には伝統絵画のことを通称して「東洋画」と呼んでいたが、第二次大戦後、「韓国画」とも呼ばれて来ている。これらは内容的には中国、韓国の故事や風景、風物を表現している。(図2)そうした伝統的な韓国画の考え方や技法によって現代を描いているものも伝統的な絵画といえる。(図3)美術の表現様式は積み重ねられるものだけではなく、表現領域として拡大するものもある。時代が後になれば以前の表現様式がなくなるのではなく、以前のものも継承されて表現方法が広がるのである。

### 2-2 西洋美術、日本美術の影響(第二層)

1910年から始まる日韓併合によって、韓国の留学生が日本で美術を学び西洋美術の影響を受けた。コ・ヒドン(高義東)、キム・グァンホ(金觀鎬)などである。コ・ヒドンは1915年に東京美術学校を卒業し、帰国後、「書画協会」を結成して中心メンバーとして活躍した。この会では西洋的画風と伝統的画風の両立を目指していた。(図4、5)キム・グァンホもコ・ヒドンと同時代に東京美術学校に留学したが、帰国後は美術から離れていった。

またイ・ジョンウ(李鍾禹)は東京美術学校から1925年にフランスに留学し、西洋画風を修得した。(図6)こうした留学生が帰郷して「朝鮮美術展覧会」などの美術活動を行った。この時代に西洋画と東洋画の

活性化が図られた。この時期は日本での美術教育から間接的に西洋美術の影響を受け、西洋画の修得が行われた。このことはその後の韓国独自の表現を試行し、確立する時期の基盤であった。

### 2-3 韓国美術の現代化（第三層）

1945年の韓国の独立以降、韓国の美術は世界に開かれた韓国のアイデンティティーを追究し、西洋美術、東洋美術を包含した韓国美術の独自性を表現した。イ・インソン（李仁星）、イ・ケデ（李快大）、ペ・ウンソン（裴雲成）、パク・スグン（朴壽根）などである。イ・インソンは東京に留学し太平洋美術学校で、主に後期印象派の画風を学んだ。（図7）イ・ケデは1934年に日本の帝国美術学校（現武蔵野美術大学）に留学し、西洋画を修得し、帰国後は人物画を独自の表現で描いた。（図8）ペ・ウンソンは1920年代にヨーロッパに留学し、帰国後は朝鮮戦争を機に北朝鮮に移った。（図9）

一方、パク・スグンは独学で絵画を修得し、油絵の具による西洋画の技法を利用して彼独自の画風を作り上げた。モチーフは庶民の日常生活を対象として、表現方法も油絵の具とキャンバスだけではなく、布や建築材料、花崗岩などの様々な材料を駆使して独特のマチエールを創出した。（図10、11）

また、モノ・クローム・アートや民衆美術やアンフォルメル、抽象美術といった展開が韓国独自の主題でなされた。そうした中にイ・ウンノ（李應魯）、パク・シアンクアン（朴生光）等が活躍した。イ・ウンノは1935年に川端画塾に学び、帰国後は国際的に活動した。表現方法は多様になり、イラストレーションのような表現も取り入れ、様々な試みを行い、最終的に抽象へと向かった。（図13）

### 2-4 現代美術の展開（第四層）

韓国美術の現代化は1990年代からの現代美術へと繋がっていく。ナムジュン・パイク（白南準）やリー・ウーフアン（李禹煥）は国境を越えて韓国のアイデンティティーを表現した。ナムジュン・パイクは1932年生まれで、1956年東京大学の美学美術史を卒業した。その後ドイツ、ニューヨークで活動し、パフォーマンス、ビデオ・アートで世界的に活躍した。（図14、15）リー・ウーフアンは長く日本に居住し、活動した。そして韓国と日本、東洋と西洋という観点とグローバリズムの中から彼独自の作品が生み出された。（図16）

このように韓国においても現代美術の活動は民族や国を超えて、グローバルな視点からモチーフを抽出し、メッセージ性の高い表現を行うものもある。環境問題や人権問題、現代科学や情報の問題、現代社会における人間存在の問題、時には政治的なメッセージも含まれる。現代美術の多様な表現は多様なテーマを有している。グローバリズムだけではなく、ローカルな伝統的内容を様々な方法でグローバルに発信するものもある。ナムジュン・パイクは前者でリー・ウーフアンは後者であるともいえる。

## 3. 韓国の美術教育課程の変遷と現状

ここでは韓国の美術教育課程の変遷について述べる。前章の近代美術の変遷は間接的、直接的に教育課程の立案に関連性を持ってきた。韓国では1946年以降、美術の教育課程は以下のように短い期間で改訂されている。基本的には10年間隔の改訂を原則としているが、社会情勢の変化に対応して微細な改訂を適宜行っている。現在までの以下の11回の改訂が行われた。

### 3-1 教授要目期（1946 - 1954）

- （1）戦後、教育課程の体系化や民主化のための礎石として、学生の個性や自由、創造的活動を尊重し、これをいわゆる「新しい教育運動」と称した。
- （2）この時期に、従来の「図画工作」が「美術」という名称に変更された。

### 3-2 第1次教育課程（1954 - 1963）

- （1）教科中心教育課程が採用された。
- （2）新しい政府樹立の直後で、社会現実の改善に強い意志を表明した教育課程の性格を明確にした。
- （3）生活・経験中心主義教育精神に基づき、創造主義美術教育の実現が強調される。実際の生活に必要な知識、技能、態度、習慣などの育成を教育目標とした。
- （4）アメリカのピーボディ教育大学教育使節団の影響を受けた。

### 3-3 第2次教育課程（1963-1973）

- (1) 進歩主義、脈絡主義、創意性中心教育課程が採用された。
- (2) 各大学に美術教育科を設置し、また小・中・高校美術教育の量的、質的拡充を期した。
- (3) 美術を日常生活に直接必要な教科として認識し、それを体系的に指導するための学年別目標が明確に提示された。

### 3-4 第3次教育課程（1973 - 1981）

- (1) 学問中心教育課程が採用された。
- (2) 文化財の愛護や保存など、民族美術教育の強調がなされた。

### 3-5 第4次教育課程（1981-1987）

- (1) 小学校1 - 2学年における統合教科の運営、音楽・美術・体育を統合した「楽しい生活」が設置された。
- (2) 小学校1 - 2学年に、造形遊びが導入された。
- (3) 3 - 6学年：書道が含まれた国定教科書が発行された。
- (4) 中・高：検・認定教科書として「美術」や「書道」が別々に発行された。
- (5) 総括目標として、小学校一樂しさ、中学校一人格の涵養、高校一人格の涵養とともに、文化の創達、国民的資質の育成を強調した。

### 3-6 第5次教育課程（1987 - 1992）

- (1) 従来の教科中心、生活中心、学問中心、人間中心教育課程などの長点を調和させて体系化した。
- (2) 美術教科の領域を、「表現」と「鑑賞」の二つに大別した。表現は「経験したことを表す、想像して表す、見て表す（絵画や彫塑）、模様を考えて飾る、環境を飾る、使い道を考えて作る（デザインや工芸）、毛筆で書く（書道）」に、鑑賞は「お互いの作品を鑑賞する、自然や造形品を鑑賞する」活動で構成した。

### 3-7 第6次教育課程（1992 - 1997）

- (1) 改定の重点として以下が規定された。
  - ①全人教育のために、造形活動を通して情緒を涵養する。
  - ②美術と生活の密接な関連を通して感性的体験を強調し、周りの環境に対して関心や改善の意志を持たせる。
  - ③伝統美術を理解し、それを継承、発展させる。
  - ④専門的な美術内容の体系を理解するように指導内容を構成する。
- (2) 理論的背景として、DBAEを紹介し、その一部を受容した。すなわち、「美術と生活」の領域を新設して美学を導入し、「鑑賞」領域では、美術史とともに美術批評をも強調された。

### 3-8 第7次教育課程（1997 - 2007）

- (1) 小学校1学年から高校1学年までの10年を「国民共通基本教育期間」として設定しその連続性や連携性を図った。
- (2) 目標の面では、健全な人格や創造性を涵養できる基礎・基本教育の充実、内容の面では、グローバル化・情報化に対応できる自己主導的能力の伸長、運営の面では、学生の能力や適性、進路に合わせた学習者中心教育の実践、制度の面では、地域および学校教育課程の編成・運営の自律性の拡大を基本方向に設定した。
- (3) 美術教科の領域を「美的体験」、「表現」、「鑑賞」の三つに提示した。  
以前の第6次教育課程における「美術と生活」の領域を拡大、発展させた「美的体験」を新設し、それを基にして「表現」や「鑑賞」の活動が活発に展開されるように内容を構成した。

### 3-9 2007改定教育課程（2007 - 2009）

- (1) 社会の急速な変化や多様な教育的要求に応じるため、部分的な随時改訂の体制を導入するようになる。
- (2) 週5日制の開始に符合する教育課程改編の必要性を提案した。

- (3) 以前の基本哲学および体制を維持しながら、美的認識能力の体系的な育成、視覚文化学習の重要性の強調、教育課程の明瞭化、美術教科内外の統合的経験の受容を改定の基本方針とした。
- (4) 各段階別目標を差別化・明瞭化させるために、小学校の3－4学年では多様な感覚体験中心の教育、5－6学年では基礎中心の教育、中学校では活用中心の教育、高校では価値中心の教育がなされるように各目標を構成した。
- (5) 総括目標：美術の多様な活動を通して、美的感受性、創造的表現能力、批評能力を養い、美術文化を享受できる能力や態度を養うようにする。
  - ①生活の中でいろいろな対象や現象に対する美的感受性を養う。
  - ②感じや思いを創造的に表現し、意思や考えの疎通ができる能力を養う。
  - ③美術の価値を理解し、判断できる能力を養う。
  - ④美術を生活化し、美術文化を尊重する態度を持つ。
- (6) 高校1学年まで共通教育科目を済ませた学生たちが自分の進路や適性に合う美術科目を選択できるように、多様な性格の科目が開設された（美術と生活、美術鑑賞、美術創作）。

### 3－10 2009 改訂教育課程（2009－2015）

- (1) 未来型教育課程の体制を具現するための2009改定教育課程の総論が改訂、告示された。美術科教育課程は2011年に告示されたが、総論の告示年度に従い、「2009改定美術科教育課程」と呼ぶ。
- (2) 教育課程の運営に学生や学校の特性を弾力的に反映させるために、授業時数の20%を増減できるようにして、自律性を拡大させた。
- (3) 美術科の目標：美的感受性や直観で対象を理解し、生活を創造的に享受しながら美術文化を継承、発展させることのできる全人的人間を育成することにある。
  - ①自分と周辺の世界に対する美的感受性を養う。
  - ②感じや思いを創造的に表現し、疎通できる能力を養う。
  - ③美術の価値を理解し、判断できる能力を養う。
  - ④美術を生活化して、美術文化を愛護し、尊重する態度を養う。
- (4) 美術の体験的、実践的、活動的性格を強調するために、従来の「美的体験」を「体験」に変更した。

### 3－11 2015 改訂教育課程（2015－ ）

- (1) 2009改定教育課程において追求された人間像に基づき、知識情報社会が要求する核心力量（キー・コンピテンシー）を備えた「創意融合型人材像」を提示した。美術科は総論における6つの核心力量（自己管理力量、知識情報処理力量、創造的思考力量、審美的感性力量、意思疎通力量、共同体力量）と連携しながら、美術科の特性を基盤して学生に期待される美術教科力量の涵養、内容の適正化などを改訂の主な方向として提示した。
- (2) 美術教科力量として、美的感受性、視覚的疎通能力、創意・融合能力、美術文化理解能力、自己主導的美術学習能力とした。
- (3) 小学校では感覚および基礎中心、中学校では活用および問題解決中心、高校では価値判断および創意・融合中心の教育がなされるように各目標を構成した。

こうした教育課程の変遷を見ると、1950年代の生活経験主義から1960年代70年代前半には体系化が行われ、1970年代後半には学問中心の教育課程に変わった。そこでは民族の美術が強調された。そして1980年代の終わりには人間中心の教育課程に変わり、1990年代には伝統美術の理解や継承が重視された。その後はグローバル化への対応、美術教育で育成する能力を明確にして現在に至っている。

## 4. 韓国の中学校の美術教科書の内容

2013年発行の教科書『中学校の美術』（金星出版社）の教育内容を見ると、次のように構成されている。  
 ①調和した生活、②視覚言語の理解、③発想と主題表現、④媒体と表現、⑤伝統の香り、⑥生活を潤すデザイン、⑦美術作品との対話、⑧美術史の理解。

この構成は先ず美術への関心を持たせ、視覚言語による表現技術を修得し、発想、主題、媒体の学習となっている。グローバル化や伝統についても学習内容となっている。そして教育内容の対象は伝統美術から現代までを包括し、美術、デザイン、工芸にわたることで前述の四層構造が基盤となっている。

韓国の中学校の美術教科書で取り扱われている教育内容を以下に述べる。これらは8つの分野に分けられている。最初に「調和した生活」と題して、美術が人生や生活にどのように関わっているのかをいろいろな角度から取り上げ、美術教育の意義を述べている。そして美術表現の要素や原理の「視覚言語」を解説している。さらに、分野としては、「主題」「媒体」「伝統」「デザイン」「美術作品との対話」「美術史の理解」を採り上げて、主題による美術との関わりを展開する構成となっている。こうした分野の分け方は近年の日本やシンガポールにも見られるもので、表現と鑑賞からなる美術教育の領域を自由に設定することによって、美術への親しみや多角的な理解を促している。(注3)

シンガポールの教科書の分類にも見られるが、「伝統」のキーワードが取り上げられ、国民文化としての美術を伝統美術や伝統文化から組み立てていることが伺える。美術教育の目的の一つは美術文化の創造であり美術文化の理解である。そして、美術文化の理解には歴史的な伝統文化が基盤となって、その上に近代の様々な表現目的と様式が存在している総体を把握する必要がある。

#### [1] 調和した生活 (生き方)

- (1) 自然と共に呼吸する生活：①われらの美しい環境、②自然を考慮した環境
- (2) 社会の中の私、そしてわれわれ：①現代社会と私、②現代社会とわれわれ
- (3) 視覚文化の理解：①広告のイメージを読む、②映像で表現する
- (4) 街の中で出会う美術：①心の通う街の壁、②生活を豊富にする街の美術、③気持ちの通う場、お祭り、④人々に近寄ってくる建築
- (5) 美術を共にする職業：①美術に関連する職業、②職業に出会う

#### [2] 視覚言語の理解

- (1) 造形言語：①造形要素、②造形原理
- (2) 線とドローイング：①線で表すドローイング、②ドローイングの拡張
- (3) 燦爛な色：①色の基礎と原理、②混色、③色相環と色立体
- (4) 色と共に：①色の対比、②色の注目と機能、③伝統の色、五方色

#### [3] 発想と主題表現

- (1) 表情のある人物：①人物に現われた表情を読む、②人物の比例(比率)、③人物の多様な表現、④風俗画
- (2) 生きている静物：①静物画と画面の構成、②静物の多様な表現
- (3) 視線の留まる風景：①興味深い風景、②遠近が活きる(強調される)風景、③私が出会った風景
- (4) 楽しい想像：①想像の世界、②着想の転換、③想像の翼を広げよう
- (5) 見直してみる錯視：①本物なの/幻想なの? ②オップ・アート、③錯視を体験する
- (6) 感じのある抽象：①現代の抽象表現、②抽象化の過程

#### [4] 媒体と表現

- (1) 多様な平面表現：①平面表現の材料、②平面表現の技法
- (2) 版の上で：①凸版画、②凹版画、③平版画、④孔版画
- (3) 空間の中の立体：①彫塑の表現、②彫塑の活用、③材料と技法の拡張、④時間と空間の拡張
- (4) デジタル時代におけるメディア：①ビデオ媒体、②光を媒体に、③コンピューターを媒体に、④メディアの開拓
- (5) レンズでみる世界：①写真の表現、②カメラの原理、③美術と映画の出会い
- (6) 幻想の漫画とアニメーション：①漫画とキャラクター、②アニメーション

#### [5] 伝統の香り

- (1) 墨の香り：①伝統絵画の要素、②伝統絵画の表現と画題
- (2) 彩色の饗宴：①彩色の材料と表現、②庶民の喜怒哀楽、民画、③伝統絵画の新しい試み
- (3) 芸術魂のこもった書：①書芸(書道)の基本、②美しい我がハングルの書体、③漢字の書体、④書芸の変形と拡張、⑤篆刻と書刻

(4) 匠人(職人)の息づかい：①生活の中で出会う工芸、②土陶磁工芸、③染色工芸

[6] 生活を潤すデザイン

(1) 快適な環境デザイン：①生活空間、舞台空間のデザイン、②街角の環境デザイン

(2) 情報を伝えるデザイン：①文字とマーク、②広告デザイン、③媒体を通じたデザイン、④イラストレーション、⑤ブック・アート、⑥パッケージ・デザイン

(3) 機能性を活かしたデザイン：①生活の中の製品デザイン、②環境を考えるグリーン・デザイン、③個性のこもったファッション・デザイン、④ユニバーサル・デザイン

(4) デザインの流れ

[7] 美術作品との対話

(1) 見て聞いて話す批評：①美術批評の過程、②批評の活用

(2) 探して読む美術：①奥深い美術鑑賞、②伝統の絵の鑑賞、③建築文化を読む

(3) 美術館を体験する：①美術館探訪、②展示の企画

[8] 美術史の理解

(1) 我が国の美術、(2) 東洋美術、(3) 西洋美術

## 5. 教科書教材と四層構造

前述の中学校の美術教育の教材と四層構造の関係を考えると、近代美術以前には韓国独自の伝統文化が美術にも工芸にも継承されてきた。その継承は単なる模倣によって継承されたものではなく、時間をかけて社会や作者の意図や工夫によって変化を遂げてきたものである。そうした伝統文化に対してグローバル化による社会の変化から西洋文化、西洋美術が影響を及ぼし、近代美術の形成を成してきた。絵画を例にとってみれば、西洋絵画の修得に始まり、その後の韓国独自の近代絵画の表現があり、現代美術に至る変遷が追跡できる。

四層構造の第一層目にあたる伝統美術については教科書の第5章で採り上げられている。題材としては、水墨画、伝統色、書、家具・木工、陶芸、染織などがある。韓国の生活の周辺に存在する美術を採り上げて、伝統文化の存在を確認している。そして伝統文化が現代の生活にも息づいていることも理解を勧めている。

第二層目の西洋文化の直接的な影響については第3章の主題の表現、第8章の美術史の章で採り上げている。それは韓国の学生が日本やヨーロッパに留学し、西洋美術の理念や技法を習得し、西洋美術の概念で絵画表現したものである。それらはその後国内に拡大し、韓国独自の西洋画となったのである。

第三層目は第二層目を受けて、西洋の美術を韓国独自に修得、消化、創造した作品である。絵画も彫刻も西洋の模倣ではなく、韓国独自の表現を追究した作品である。それは西洋美術の表現そのものではなく、西洋美術の材料、用具、技法を利用した韓国の美術の表現といえる。同時にその時代にはデザインの普及が全世界に始まり、表現分野としてデザインが美術教育の対象となってきた。そしてその基礎となる視覚言語が教育の対象となり、教科書では第2章で視覚言語を扱っている。

第四層目の現代美術の表現は、美術やデザイン、工芸といった領域を統合して捉え、表現媒体も表現目的も多岐にわたっている。教科書では第4章に表現媒体の多様性の一つとして紹介されている。現代の美術は従来の美術館やアート・ギャラリーに展示するためだけの美術作品として捉えるのではなく、表現手段と表現媒体が多岐にわたってきている。その概念は曖昧で感覚的な捉え方になる恐れもあるが、「アート」という言葉で、美術の持つ目的、意義、付加価値などを包括する内容を示す場合が増えている。メッセージを有する作品もアートとして作品とプロセスをも包括することができる。

美術教育の教育課程の編成、教材の作成を考えるうえで、美術の領域を四層構造によって把握することで、美術の対象を総体として捉えることができる。もちろん発達段階を考慮する必要があり、義務教育段階の修了までに美術の総体を理解し、グローバル化している世界と国民文化の関係を修得することが望ましいと考える。

## 付記

本稿の作成に当たり、1章、2章、4章、5章を福田が、3章を金香美執筆し、全体を福田がまとめた。

## 注

- 1 本研究は文部科学省科学研究費補助金を以下のように受けている。石井由理代表「アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成」(2017-2020、研究種目：基盤研究(C)、課題番号：17K04793)
- 2 福田隆眞、「アジアの近代美術の構造と美術教育－東アジアと東南アジアの事例－」(金子一夫責任編集『美術教育学の歴史から』収録)、美術科教育学会、学術研究出版、2019  
シンガポールの教科書では2000年以降は、美術制作、デザインの要素と原理、形態、人々、対象、経験、伝統、環境の8つのテーマに基づいて表現と鑑賞を進めている。(Imants Kruminis “EYE FOR ART Visual Arts for Secondary One” Oxford 2000)

## 図版出典

- 2 『中学校の美術』 韓国・金星出版社 2013年 p142
- 3 『中学校の美術』 韓国・金星出版社 2013年 p149
- 4 Youngna Kim, Modern and Contemporary Art in Korea, Hollym, 2005 p7
- 5 Youngna Kim, Modern and Contemporary Art in Korea, Hollym, 2005 p11
- 6 ラワンチャイクン寿子他、「官展にみる近代美術」、福岡アジア美術館、2014 p98
- 7 ラワンチャイクン寿子他、「官展にみる近代美術」、福岡アジア美術館、2014 p102
- 8 ユン・ボムモ編、「韓国近代美術の韓国性」、ガーナアート、1992、p68
- 9 Youngna Kim, Modern and Contemporary Art in Korea, Hollym, 2005 p23
- 10 展覧会図録「朴壽根」、ガーナアート、2014、p51
- 11 展覧会図録「朴壽根」、ガーナアート、2014、p131
- 12 展覧会図録「朴壽根」、ガーナアート、2014、p155
- 13 ユン・ボムモ編、「韓国近代美術の韓国性」、ガーナアート、1992、p68
- 14 The Curatorial Department of Leeum, Samsung Museum of Art, Leeum Guide Book, 2017 p90
- 15 Youngna Kim, Modern and Contemporary Art in Korea, Hollym, 2005 p82
- 16 The Curatorial Department of Leeum, Samsung Museum of Art, Leeum Guide Book, 2017 p91

## 参考文献

- 金英那著、神林恒道監訳：「韓国近代美術の百年」、三元社、2011。  
The Curatorial Department of Leeum, Samsung Museum of Art, Leeum Guide Book, 2017。  
Youngna Kim, Modern and Contemporary Art in Korea, Hollym, 2005。  
徐正洙・森本勝彦：「韓国の文化」、ハンセボン、2006。  
姜健栄：「近代朝鮮の絵画」、朱鳥社、2009。  
ラワンチャイクン寿子 他：「官展にみる近代美術」、福岡アジア美術館、2014。  
福田隆眞：「アジアにおける近代美術の四層構造と美術教育」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第44号。  
福田隆眞：「韓国近代美術への思い」、『Koreana 韓国の文化と芸術』秋号2019収録、韓国基金、2019。  
展覧会図録：「朴壽根」、ガーナアート、2014。



図版



図2 ホ・ペギョン「白雲と山」1958



図3 カン・ヘオン「都会が見える場所」1984



図4 コ・ヒドン「洗濯」1915

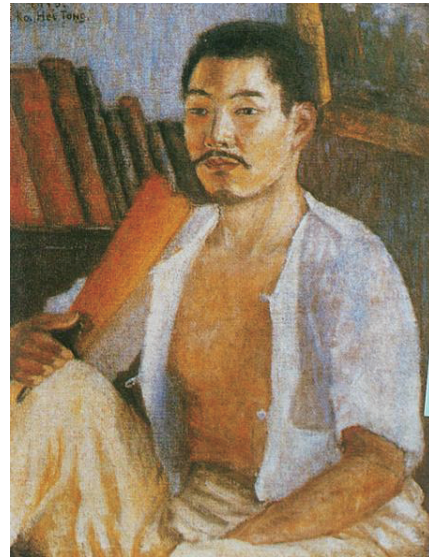


図5 コ・ヒドン「自画像」1915



図6 イ・ジョンウ「人形がある静物」  
1927



図7 イ・インソン「窓辺」1934

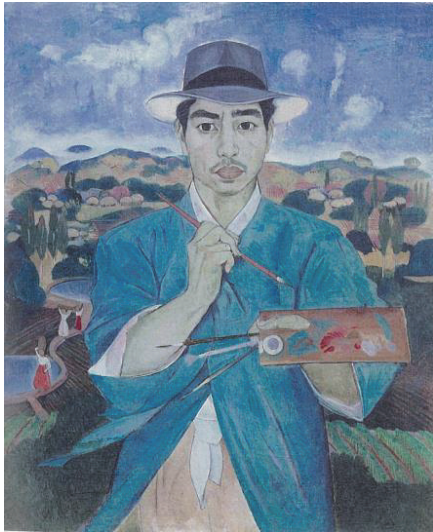


図8 イ・ケデ「韓国衣装を着た自画像」  
1948-49



図9 ペ・ウンソン「家族」1930-35



図10 パク・スグン「道端の商売」1957



図11 パク・スグン「座る女」1963

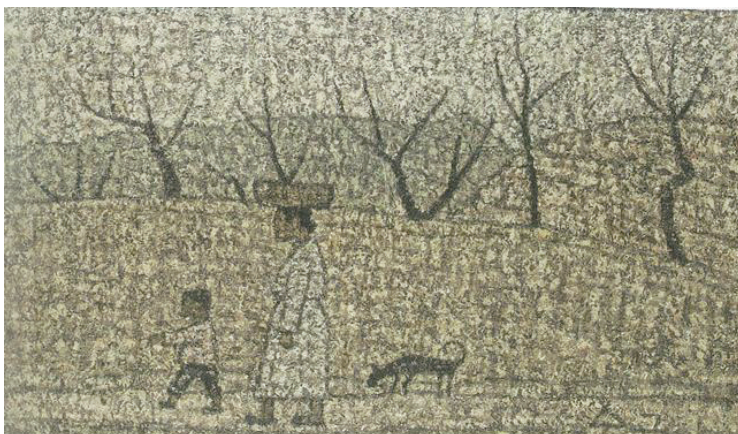


図12 パク・スグン「帰り道」1965

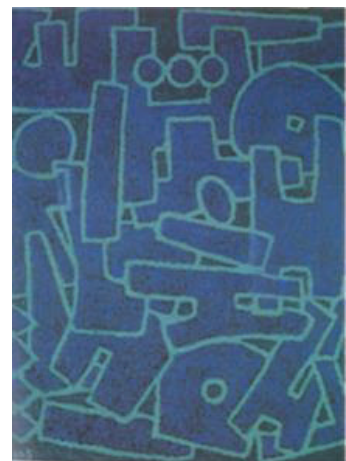


図13 イ・ウンノ「構成」1981



図 14 ナムジュン・パイク「私のファウスト」  
1989-91



図 15 ナムジュン・パイク「より多くより  
り良く」1987

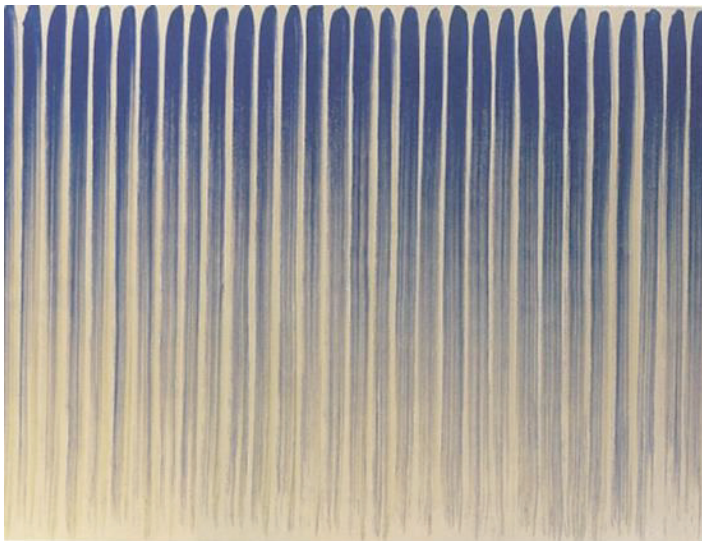


図 16 リー・ウーファン「線から」1979